

フィリピン人歴史家によるフィリピン史への挑戦

—アンベス・R・オカンポのフィリピン革命史論—

永野 善子

はじめに

昨年に公表した拙稿で明らかにしたように、第二次世界大戦後に独立したフィリピンの歴史学界では、独立国家建設における重要な礎としてフィリピン革命が重要な文化的意味をもってきた。とくに1960年代以降には、19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期におけるフィリピン独立革命を「未完の革命」として位置づけ、さまざまな議論が展開されてきたからである（永野2020:131）。

フィリピンでは19世紀末に対スペイン独立革命が勃発したものの、米西戦争とのからみでアメリカが軍事的介入したことにより、フィリピン・アメリカ戦争へと発展した。その結果、革命政府が瓦解し、フィリピンは新たな宗主国としてアメリカの支配下に置かれることになった。こうした状況を受けて、1960年代以降に展開される「未完の革命」論では、革命政府を率いたものの、アメリカの軍事的介入に屈服したエリート層は「革命の裏切り者」であり、「革命を持続する民衆」の「敵」として理解されてきたのである。

しかし、近年、フィリピンでは、フィリピン革命史に関する研究書や歴史書が多数公刊されてきた。これらの一連の著作にみられる全般的特徴とは、長らくフィリピン独立革命の主たる担い手として位置づけられてきた一般民衆像に再検討を加えながら、社会の中間層もしくはエリート層に焦点をあてつつ、フィリピン革命を政治的現象としてではなく、その社会・文化的側面に関心を向けながら、多角的な観点から革命のダイナミズムへの接近を試みているところにある。

このようなフィリピン革命史のアプローチの変化は、大局的にみると、1986年2月のいわゆる「民衆革命」（エドサ革命）によってマルコス政権が崩壊し、フィリピン社会のなかにそれまでとは異なる民主化への大きなうねりが生まれたことと大いに関連しているように思われる。本小論では、1986年政変後のポスト・エドサ時代からフィリピンの文壇に登場したアンベス・R・オカンポを取り上げ、彼のフィリピン革命へのユニークなアプローチの一端を紹介することにしたい。

1. アンベス・R・オカンポの執筆活動

アンベス・R・オカンポは、現在、フィリピンで最もポピュラーな歴史家のひとりである。筆者がオカンポの存在を知ったのは、1995年に州立ハワイ大学で開催された国際フィリピン研究学会であり、そのときにユニークなホセ・リサール論を発表したときであった。しかし、その後、しばらく彼の著作に触れることはなかったが、1998年11月～99年3月に、本学の海外長期研修制度を利用して国立フィリピン大学経済学部客員研究員として首都圏マニラのケソン市に滞在したとき、空き時間を利用して彼の著書を読むことができた。

当時、筆者はアメリカ植民地期のフィリピンにおける金融問題について政治制度との関連で史料調査をおこなうため、ウィークデイはほぼ毎日、ケソン市から車で1時間ほど離れたマニラの国立図書館にかよっていた。そうした生活が落ち着くなかで、夜間には、オカンポのフィリピン独立革命史に関わるエッセイ集を1章ずつ読むのが日課となり、彼がそれまでのフィリピン人歴史家とは異なるスタンスでフィリピン革命時代に生きた人々の姿や社会生活を描き出していることに触れるようになった。ひとつ

ひとつのエッセイには、一見すると小さなエピソードが取り上げられているのだが、それらを読み進めるうちに、これまでフィリピンのどの歴史家によっても描かれなかった人物像や社会像が浮き彫りになってゆく、その独特の執筆手法によって、オカンボが多くの読者を引きつけてきたことに気づいたのである。

以来、筆者は毎年、1〜2回、フィリピンにほぼ定期的に出張してきたが、フィリピン滞在中、時間的余裕があるときは、フィリピンの有力全国紙のひとつ、『フィリピン・インクワイアラー』にほぼ毎週掲載される、オカンボのコラムに目を通すのを楽しみにしている。もちろん日本にいても、インターネットをとおして彼のコラムに触れることはできるのだが、日本にいたときよりも、フィリピンに滞在したときにオカンボのコラムを読んだときの方が、その面白さが伝わってくるのである。その理由は、オカンボがマニラの高級住宅街マカティ地区に住みながらも、フィリピン社会の流れに即して、その歴史にかかわるさまざまなテーマについてコラムを書き続けているため、歴史に関心のあるフィリピンの人々の心を掴むことに成功してきたように思われる。

このオカンボであるが、近年、日本でもアジア研究者の間では広く知られる人物となっている。オカンボ自身が大の日本好きで、頻繁に来日しており、また2016年には福岡アジア文化賞の学術研究賞を受賞している（福岡アジア文化賞2016）。

その略歴についてみると、1961年にマニラで生まれ、アテネオ・デ・マニラ大学付属小学校と高校を卒業後、1989年にデ・ラ・サール大学を卒業し、1991年には同大学でフィリピン研究の修士号を取得した。しかし、オカンボが新聞や雑誌のコラムニストとしてその才覚を発揮し始めたのは、デ・ラ・サール大学卒業以前のことであった。1985年から日刊紙『フィリピン・デイリー・エクスプレス』の日曜版『ウィークリー・マガジン』にコラムを書き始め、その後日曜版の編集スタッフとなった。さらに1987年から『フィリピン・デイリー・グローブ』に「過去を振り返る（Looking Back）」と題する定期的コラムを担当するようになった。

そしてオカンボのユニークな執筆活動に対する評価を不動のものにしたのが、こうしたコラムを集めて1990年に公開された二冊の著書、『外套を脱いだリサル（Rizal without Overcoat）』（Ocampo 1990a）と『過去を振り返る』（Ocampo 1990b）とであり、とくに前者は全国フィリピン図書賞（エッセイ部門）を獲得した。その後、コラム「過去を振り返る」の発表の場を『フィリピン・デイリー・インクワイアラー』（現在では『フィリピン・インクワイアラー』）に移しながら、今日にいたるまで執筆活動を続け、すでに刊行された著作は40冊以上にも及ぶという（Wikipedia Ambeth Ocampo; Ocampo 1995: Preface）。

多くの著作群のなかでも、群を抜くのは『外套を脱いだリサル』であり、1996年に改訂版が、そして2000年に拡大版（Ocampo 2000）が、さらに2011年のリサル生誕150年を記念して2012年に改訂版が出版されている（Ocampo 2012）。オカンボのコラムやエッセイは、フィリピン史に関わる政治・社会・文化など多岐にわたるテーマを取り上げているが、そのなかでも最も得意とするテーマはホセ・リサル論である。その膨大な知識は、東南アジア研究で最も著名な研究者のひとりであるベネディクト・アンダーソンをして、「ホセ・リサルについて百科全書的知識を持つ人物」と唸らせたほどである（アンダーソン 2009: 142-143）。さらに大いなる史料収集家でもあり、その史料考証には定評がある。例えば、すでに別稿で扱ったが（永野 2000）、1990年代後半にフィリピン革命史をめぐるアメリカ人とフィリピン人歴史家の間の論争のきっかけとなった、グレン・メイの『英雄の捏造』のなかで議論された史料の信憑性に関わる問題のうちのいくつかは、最初にオカンボが提起したものであった（Ocampo 1995: 5-9; 永野 2002: 188）。

本小稿ではその膨大な著作群のすべてを扱うことはできないので、次節では、オカンボのユニークな執筆活動を的確に位置づけた論考として、在米のフィリピン人歴史家ビセンテ・L・ラファエルの評論を紹介することにしたい。

2. ビセンテ・L・ラファエルのオカンボ論

管見の限り、アンベス・オカンボのフィリピン歴史論のユニークさとフィリピン社会における位置づけについて最も包括的な見解を提示しているのは、アメリカ在住のフィリピン人歴史学者ビセンテ・L・ラファエルである。

ビセンテ・ラファエルは、1956年マニラ生まれで、オカンボより5歳年上である。1977年にアテネオ・デ・マニラ大学を卒業後、アメリカのコーネル大学に留学し、1984年に博士号（東南アジア史専攻）を取得した。ラファエルのフィリピン歴史学者としての地位を確立した著作は、1988年に公刊した野心作『契約としての植民地主義：初期スペイン統治下のタガログ社会における翻訳とキリスト教への改宗』（Rafael 1988）である。以後、今日にいたるまでフィリピン歴史研究、とくに文化研究の分野において精力的に活動を続け、2003年からはワシントン大学教授として教鞭をとりつつ数冊の研究書を刊行してきた（永野 2004: 371-374）。そうした立場から、ラファエルは、オカンボの著書のひとつ『ルナの口髭』（Ocampo 1997）に長文の序論を寄せ、オカンボの一連の歴史論の特徴を的確に論評している。以下では、その要旨を簡単に紹介することにしたい。

この序論で、ラファエルがまず注目したのは、オカンボの世代がフィリピンのマルコス政権下で1972年に発令された「戒厳令」時代に育った、いわゆる「戒厳令世代“Martial Law Babies”」であることである。フィリピンは、1981年の戒厳令解除後、きわめて政治的不安定な状況が続き、1986年の「民衆革命」を経てマルコス政権が崩壊した。こうした大きな政治変動のなかで、マニラで育ち、エリート校で学んだ「戒厳令世代」の多くは、それまでフィリピン政界を支配してきた既成の政治勢力であれ、左翼を軸とする反対勢力であれ、いずれにおいても権威主義的な政治的支配が展開される状況に対して懐疑的な姿勢をもつようになり、従来とは異なる視点で自分自身のアイデンティティを模索していった。1987年に始まったオカンボの定期的コラム「過去を振り返る」は、こうした時代背景のもとで同世代の人々だけでなく、より年齢の高い世代からも多くの読者を獲得することになったという（Rafael 1997: 2-3）。

しかし、オカンボは、フィリピン史を題材としてコラムを執筆する歴史家兼ジャーナリストとして唯一の存在ではない。フィリピン社会では、ジャーナリズムが社会の歴史の変容を語る場として植民地期以来重要な役割を果たしてきており、今日のフィリピン社会で多くの著作が愛読されてきた代表的人物としては、日本でも翻訳があるニック・ホアキンの名を挙げることができよう。そうしたなかでも、歴史家兼ジャーナリストとしてのオカンボには、ほかの書き手からは得られない特異性があり、その特異性の主要な部分は次の三つである、とラファエルは語る。

第1に、オカンボが語るストーリーのなかに潜むアイロニー、すなわち皮肉である。これまでの歴史家は、フィリピン革命を扱う場合、その指導的役割を担った人物をなかば聖人のように扱い、その歴史的偉業を讃えるのが常であった。ところが、オカンボはそうした手法をまったく用いない。むしろ、一般の歴史家がまったく関心をもたなかったような些細かつ意外なエピソードに着目し、歴史上の英雄の人間としての普通の姿や汚れた側面を描き出す。そうすることによって、これまでの歴史書では一般人からかけ離れた存在として扱われてきた歴史的英雄を、市井の人々の日常のなかに投入することに成功している（Ibid.: 3-4）。

第2に、オカンボは、スペイン語、タガログ語そして英語による膨大な一次史料を駆使しながら、これまで枝葉末節と捉えられ、ほとんど顧みられてこなかった小さなエピソードを多くのエッセイのなかで掘り起こすことによって、長らく一般化されてきた歴史事件や人物像にくさびを打ち込んできた。こうした歴史叙述のスタイルは、歴史とは、年号や名前の羅列ではないことを物語る。そうだとすると、歴史叙述における「事実」と「虚構」との明確な境界とはいったいどこにあるのかという、きわめて意味深長な問いを読者に突きつけることになった（Ibid.: 6-7）。

さらに第3には、歴史学者であれば誰でも、現代における課題との関連で過去の事象を取り上げる意味を考えるものだが、オカンボの場合、この現在と過去との対話を設定するにあたり、常に日々の暮ら

しのなかの具体的な事象に焦点を当てているところに、その特徴がある。この結果、オカンボにとって、歴史とは、記録文書の束を解説したものではなく、自らが目にしたり、手にしたりするような、さまざまな文書や物体から自らが理解したもの、あるいは感じとったものなのである。このため、オカンボは、さまざまな文書や物体を、博物館のなかで分類され、固定され静止されたように秩序立てて整理するのではなく、読者に多様な想像力や光景を提供できるよう、歴史上の日常のありふれた出来事へのこだわりを続けるのである (Ibid.: 7)。

ラファエルは、以上のように3点に絞ってオカンボの歴史叙述の手法の特徴をまとめている。さらに、オカンボのコラムやそのコラムを編纂した著作が多くの読者を引きつける理由として、オカンボのコラムが英語で書かれていることにも着目する。マニラを中心とする一般民衆は、「タグリッシュ (Taglish)」と呼ばれる、タガログ語まじりの英語を日常の言語として使用してきたが、1986年の「民衆革命」後、この「タグリッシュ」こそ、フィリピンの大衆社会のなかの半ば「公用語」として認知されてきたと、ラファエルは主張する。確かに、オカンボのコラムは英語で書かれているが、そのなかに日常使われるタガログ語がふんだんに取り入れてられている。このような英語のコラムの書き方は、海外の読者ではなく、フィリピンの人々、とくに中間層、そして中間層への上昇を望む人々に向けられてきたのである (Ibid.: 8-12)¹。

ラファエルがオカンボのコラムを読むようになったのは、1980年代後半から彼の父親がそのコラムの切り抜きをフィリピンから郵送してくれたのがきっかけであり、こうしたやりとりは1996年に彼の父親が亡くなるまで続いた。この結果、オカンボのコラムの切り抜きはアメリカに在住しながらフィリピン研究を続けるラファエルと、1986年の「民衆革命」以後大きく変化していったフィリピン社会とをつなぐ重要な糸となったという (Ibid.: 1)。このことは、前述のように、筆者の場合、日本にいるときよりも、フィリピンに滞在したときにオカンボのコラムを読んだときの方が、その面白さが伝わってくることに通じるところがあるように思う。

次節では、オカンボの出世作である『外套を脱いだリサール』から二篇のコラムを紹介することにした。

3. 『外套を脱いだリサール』を読む

アンベス・オカンボの多くの著作群の真髄は、やはりそのホセ・リサール論である。オカンボは、フィリピン人歴史家のなかでリサールの著作のみならず、リサールの全人生について最も詳細なデータを蓄積している人物として広く知られている。1990年代にはその研究を博士論文としてまとめるために、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS) に在籍していた経験をもつ。そして何より、オカンボの出世作の『外套を脱いだリサール』であるが、1990年の刊行以来数回にわたって改訂され、その内容の一部も刷新されている。このことからみて、オカンボのフィリピン史を題材とするコラムニストのもつ視点と特徴を描くためには、『外套を脱いだリサール』に所収されているコラムのなかから数編を紹介することが適切であろう。

1990年初版の『外套を脱いだリサール』は160頁の小著である。「序文」、「プロローグ (序論)」、「時事と可能性」、「家族およびその他の人々」、「リサールの日常」、「伝説的才能」、「終わりなき物語」、「女性たち」、そして「エピローグ (結語)」より構成されている。その「プロローグ (序論)」の冒頭に所収されたコラムの論題は「ホセ・リサールはアメリカが担ぎ出した英雄であったのか？」である。フィリピン史に一定の知識をもつ研究者であれば、この論題自体が、フィリピンの左翼歴史家として著名なレナト・コンスタンティーノが提示し、その後長らくフィリピンの文壇で影響力を持ち続けたリサール論への挑戦であることが読み取れる。

すでに別稿で明らかにしたように、コンスタンティーノは1969年のリサール記念日に「無理解による崇拜：リサール論」と題する記念講演をおこなった。その講演をもとに後日発表された評論では、フィリピン社会のなかで定着していたリサール崇拜に対する痛烈な批判が展開され、大きな反響を与える

ことになった。コンスタンティーノによれば、これまでフィリピンで国民的英雄とされてきたリサルは、フィリピン独立革命の眞の指導者ではなく、むしろアメリカが植民地支配を容易にするために仕立てた英雄にすぎない、としたのである（永野 2013: 85）。

他方、オカンボは、「プロローグ（序論）」に所収されている「ホセ・リサルはアメリカが担ぎ出した英雄であったのか？」と題するエッセイによって、コンスタンティーノが通説を覆して構築したリサル像に対して、一見柔らかな、しかし半ば皮肉を込めた筆致で異議を唱えている。1988年6月19日に書かれたこのエッセイの冒頭で、オカンボは、「今日は国民的英雄であるホセ・リサルの127回目の生誕記念日であるが、ほとんど無視されることになるだろう。なぜなら、リサルが1896年のフィリピン革命の指導者ではないという事実に基づいて、多くのフィリピン人がはっきりしない態度をとっているからだ」（Ocampo 1990a: 2）、と主張する。オカンボは、アメリカ人たちがリサル崇拝を後押しし、アンドレス・ボニファシオやアポリナリオ・マビニ、そしてエミリオ・アギナルドなど対スペイン独立をめざしてフィリピン革命を戦った人物たちの存在をやや曖昧にしたことは確かである。しかし、ここで忘れてはならないことは、リサルは1986年12月30日に処刑される前からすでに英雄とみなされていたことだとする（Ibid.）。

その理由は次のとおりである。アンベスによれば、リサルは裁判で「あなたは革命に参加していたのか」とスペイン人の裁判官に尋問された。なぜ裁判官がそのような尋問をリサルにしたのかというと、リサル自身は武力革命を支持していなかったものの、武力革命をめざした結社カティプナ（略称：KKK）が用いたパスワードが「リサル」であり、この組織の本部や集会場にはリサルの写真が貼ってあったからである。このため、スペイン人の裁判官は、リサルが武力革命の背後にいたはずだと考えたのである。さらにカティプナの創始者アンドレス・ボニファシオは、リサルが革命を指導できるよう、ミンダナオ島ダビタンに幽閉されたリサルの奪還をも試みた。さらに、革命政府を引いたエミリオ・アギナルドは、1898年にリサルの敬意を表するために12月30日を「国民哀悼の日」と宣言したという事例もある（Ibid.: 3）。

こうした事実をもってすれば、たとえアメリカ人がリサル崇拝を助長したことがあったとしても、リサルはそれ以前からすでにフィリピン人の国民的英雄となっていたのであり、アメリカ人はそうしたフィリピン人の心情のうえに立ってリサル像を創り上げたにすぎないことになる。さらに、リサルの裁判記録には、リサルが「革命の魂」であったとも記されている。このことは、リサルは革命を実際に遂行した指導者ではなかったが、革命を大いに鼓舞したことを示すものである。したがってリサルを中傷する人々は、広く受け入れられている反米的信条に沿ってリサルを過少評価するのではなく、新しい思考によって議論を展開すべきだ、とオカンボは主張する（Ibid.）。

このようにオカンボは、ともすれば忘れがちな仔細な事実を掘り起こし、それを散りばめながら、1970年代以降、フィリピン社会のなかで半ば硬直化したリサル論に対して新しい息吹を与える試みを執拗に続けていく。その試みは、ビセンテ・ラファエルが適格に把握しているように、既成の政治的立場や信条に基づいて歴史的事実を語るという従来の手法から自らを解き放ち、自らが目にした事実に寄り添いながら、歴史を描き直すという、オカンボ流の歴史論を構築する原動力となったといえよう。

さらに「プロローグ（序論）」では、コラム「レクトのリサル法案」が所収されている。そもそも「リサル法案」とは、上院議員のクラロ・M・レクトが主たる提唱者となり、フィリピンのすべての教育機関で国民的英雄リサルとその主要な著作について学ぶことを義務づけた法案で、カトリック教会の執拗な抵抗の末に1956年6月12日に法律として制定されたものである。オカンボがこのコラムを書いた1990年当時すでにフィリピンの大学で教鞭をとっており、そうした経験から、ほとんどの大学生は必修課程としての「リサル学」がレクトの多大な努力によって導入されたことを知らないことを、彼独特のウィットでもって次のように語っている。

国立フィリピン大学では、「リサル学」は、「PI100」、あるいは「Philippine Institutions100（フィリピンの諸制度100）」とコード化されているが、学生たちはこの科目名の「PI100」をタガログ語で揶揄して「Putang Ina 100（くそ野郎100）」と呼んでいる。オカンボは、そうした学生たちの心情がわか

ないでもない、という。なぜなら、1986年に彼の母校であるデ・ラ・サール大学で「リサール学」を担当することにした主な理由は、この科目を自分自身が履修したときの教え方に合点がなかったので、学生たちにリサールについて異なるかたちで勉強できる方法を提示することを約束していたからである。

実際、かつてのスペイン語の必修課程がそうであったように、学生たちにとって、「リサール学」を受講した最初の日から、この科目が役に立たないと感じるのが常であった。そして、リサールはアメリカが創り上げた英雄だとする「ごまかし」が広範に受け入れられ、むしろボニファシオこそ真の英雄であるとされてきた社会的風潮がこうした雰囲気をもたらし、オカンボは、こうした状況を打開すべく、レクトが1956年に「リサール法案」を可決するためにどれほど果敢に戦ったのかを学生たちに教え始めた。そうすると、レクトはすでに広く知られた国民主義的アイコンだったので、学生たちの不平は消え、オカンボの授業に耳を傾けた、という。

それでは、なぜカトリック教会は、「リサール法案」に反対したのだろうか。リサールには有名な二つの小説『ノリ・メ・タンヘレ（われに触れるな）』（1887年）と『エル・フィリプステリスモ（反逆）』（1891年）があるが、当時カトリック教会の権威の間では、前者には170件の、後者には50件のカトリック教会の教義に反する文章があることがわかったためだという。実際、彼らはリサールの小説やその他の著作から一部を抜粋したものを読むことができることを確認したのだが、それでもカトリック教徒がカトリックの教義に反すると考えられた文章をまったく削除せずにリサールの著作に触れることは、カトリック教徒がもつ良心の自由に関与すると主張した。しかし、リサールの小説を読む現代の大学生たちは、1956年にカトリック教会が持ち出した論争がどのような意味をもっていたのかをほとんど理解できない世代である。リサールの最初的小説『ノリ・メ・タンヘレ（われに触れるな）』は、1887年に出版されるやいなや発禁となったが、1956年当時、まさに19世紀末と同様の魑魅魍魎が跋扈していた、とオカンボは皮肉を込めて語るのである（Ibid.: 9-10）。

こうした議論の進め方からも明らかなように、オカンボのコラムは、フィリピン社会で現実起きていることを常に念頭に置きながら、必ずしも歴史に関心をもたない人々の目からも容易に現在と過去を結びつける糸を巧みに見出す独自の手法に満ちている。次節では、フィリピン革命に関わるさまざまな話題を題材にしたコラムを収録した著書『ボニファシオの山刀』から二篇のコラムを取り上げることにしたい。

4. 『ボニファシオの山刀』を読む

『ボニファシオの山刀』は1995年に刊行されたエッセイ集であり、その多くは1991～93年に書かれたものであるが、1986～88年のコラムも散見される。ここでは、オカンボのフィリピン独立革命についての見方がよく表れているコラムとして、「ボニファシオは最初の大統領だったのか？」と「大衆の叛乱」の二つを取り上げたい。前者は1992年の初出であり、後者は1991年である。

「ボニファシオは最初の大統領だったのか？」で、オカンボは、かつてのように7月4日をフィリピン独立記念日とみなすのか、あるいは今日のように6月12日のままとするのかで、1992年6月に大統領に就任するフィデル・V・ラモスが、第8代フィリピン大統領になるのか、それとも第12代大統領になるのかの違いがでてくるという。1898年6月12日を独立記念日とすると、アギナルド、ケソン、ラウレル、オスメーニャ、ロハス、キリーノ、マグサイサイ、ガルシア、マカパガル、マルコス、アキノ、そしてラモスとなる。他方、1946年7月4日をその記念日とした場合、大統領はロハスから始まることになる。とすると、フィリピン人は捉えがたい自己のアイデンティティのゆらぎに直面することになる。

実際、1898年にアギナルドが構築した共和国は、フィリピン革命軍が支配した以外の地域では承認されなかった。ケソンはフィリピン・コモンウェルスの大統領であったが、それは独立準備政府にすぎなかった。ラウレルは日本占領下の「傀儡政権」の大統領にすぎず、オスメーニャは、日本占領期にア

メロカに亡命していたケソン政権の副大統領であったため、彼の死後、マッカーサーとともにフィリピンに帰還した人物である。だが、事実がこうだからといって、独立記念日を再び7月4日に戻したいというわけではない、むしろ、フィリピン人の視点から、アギナルドの独立宣言と短命であった第一次フィリピン共和国を受け入れたいと、オカンボは主張する。

こうした観点は、「非歴史的」とみなされるだろう。しかし、国立フィリピン大学で学生に教える「歴史 (kasaysayan)」とは、過去の事件の叙述 (sanaysay) ではなく、一定の人々にとって意味のあるもの (saysay) であるべきだ、とオカンボはいう。とすると、ボニファシオこそが「我々の最初の大統領」だったのではないのか、という疑問を呈することになる。ここでオカンボは独特のウィットを持ち出す。つまり、ボニファシオが最初の大統領だとすると、ラモスは9番目もしくは13番目の大統領となるが、双方とも不吉な数字になってしまうのである、と。

それでも、なぜボニファシオに固執するのだろうか。1897年にボニファシオとアギナルドの二つの革命勢力が対立した会議がテヘロスで開催されたが、そこでボニファシオが発行した布告や文書には、みずから「タガログ地域国大統領 (Pangulo ng Haring Bayang Katagalugan)」と呼んでいた。多くの歴史家たちは、この名称をもってタガログ地方に偏重した民族主義者だとしてボニファシオを矮小化しているが、「タガログ地域 (Katagalugan)」という国を示す単純な言葉こそ、今日のフィリピンを示した用語だったのではないかとオカンボはいう。なぜなら、1896年8月にフィリピン革命が勃発するまえに、ボニファシオは革命結社カティプーナンの主要メンバーからなる政府をすでに創設していた。この政府は武装蜂起のなかで実際には機能することはなかった。しかし、一定の意味をもつ視点からみれば、ボニファシオは革命結社カティプーナンの指導者以上の人物とみなすことができるのではないだろうかとして、オカンボはこのコラムを結ぶのである (Ocampo 1995: 13-15)。

次に「大衆の叛乱」についてみてみよう。このコラムの表題は、明らかにフィリピン革命史の重鎮テオドロ・アゴンシリョの出世作『大衆の叛乱：ボニファシオとカティプーナンの物語』(Agoncillo 1956/1996)を意識したものである。アゴンシリョは同著によって、それまで広く受け入れてきたフィリピン革命史像を一変させた。なぜなら、それまで公に認められてきたフィリピン通史では、フィリピン革命の主要な担い手はアギナルドに代表される地方有力者層であり、民衆は革命の遂行において副次的役割を担っていたにすぎないとされてきた。これに対し、アゴンシリョは『大衆の叛乱』で、従来のフィリピン革命像を覆し、革命を動かしたのはボニファシオを中心とする民衆であると主張したからである。そして、この画期的著作はその後、数十年にわたりフィリピン革命史研究に多大な影響を与え続けることになった (永野 2000: 34)。

オカンボは、このコラムにおいて、アゴンシリョが『大衆の叛乱』で提示した研究の枠組みに対して、持ち前のウィットを込めながら異議を唱えている。その著述は、一般に流布しているボニファシオのイメージについてのコメントから始まっている。すなわち、「偉大なる一般人 “Great Plebeian”」として知られるボニファシオについて広く流布するイメージとは、第二次世界大戦前にマニラ北方のパリントワクに建立され、現在は、国立フィリピン大学に移管された像やボトン・フランシスコがマニラ市庁舎に描いた壁画の姿である。それは、裾をまくり上げたズボンをはき、カミサ・デ・チーノと呼ばれる普段着のシャツに赤のネッカチーフをして、ボロと呼ばれる山刀を携えている。

しかし、フィリピンの正装であるバロン・タガログを着て腰にピストルをさげた、フィリピン国立芸術家の称号をもつ彫刻家ギレルモ・トレンティーノによるボニファシオ像に関心が示されないのは、やはり奇妙なことだという。オカンボは、多くのフィリピン人が長らく抱いてきたボニファシオのイメージは、なんといってもアゴンシリョの『大衆の叛乱』がボニファシオを「大衆」と描いたことが大きく影響しているとする。そこで、オカンボは、問うのである——かの革命は本当に大衆の叛乱だったのか、と。

オカンボによれば、広く知られてはいないが、フィリピン革命はアゴンシリョが描いたよりより複雑な様相を呈していたとの主張をおこなう研究者たちがいる。そうしたなかで重要な問題となるのは、革命の時代の社会の階級構造についてである。一般的に階級構造を理解する場合、「持つもの “may kaya”」

と「持たざるもの“mahirap もしくは walang kaya”」というように、二つの階層に分けて考えるが、こうした場合、「中間層」をどう位置づけるかが課題となる。エリート層もしくは富裕層の場合、資産があり、社会的影響力をもち、高い教育水準を享受する人々といえるが、大衆の場合、とらえがたいものとなる。そもそも歴史を書くのはエリート層なので、書かれた歴史はほとんどが上からの視点で捉えられたものとなる。同時にエリート層についても簡単には定義できないという。例えば、フィリピン革命の時代に啓蒙的な活動をした人々をフィリピンではイラストラード、すなわち「啓蒙的知識人」と呼ぶ。彼らは資産家であることが多いため、エリート層もしくは富裕層を指す用語としても使われることがあるが、金持ちが必ずしも「啓蒙的知識人」とは限らない。

また、ボニファシオはおそらく貧しかっただろうが、彼の知的水準は「大衆“masa”」の水準をはるかに凌駕するものであり、この意味でいわゆる「大衆の叛乱」理論はその意義が薄れることになる。同様に結社カティプナーンの重要メンバーであったエミリオ・ハシントやピオ・バレンスエラもまた大衆の域を大きく逸脱していた。他方、アギナルドは、マニラ近隣のカピテ州に一定程度の資産をもっていたのでエリート層の一員とみなされることが多いが、彼が実際に住んでいた家は、石造りではあったが屋根はニッパ椰子を葺いたものであり、当時、マニラのキアポ地区に居住し、代表的「イラストラード」とみなされたパテルノ、アラネタ、パルド・デ・タペラのような富裕層ではなかった。

こうしてみると、フィリピン史では、長きにわたり、明確に定義することなく、「富裕層」、「中間層」そして「下層」という用語が使用されてきたことがわかる。とすると、どのようにして、1896年の武装蜂起が大衆の叛乱であったと知ることができるのだろうか、とオカンボは疑問を呈するのである（Ocampo 1995: 16-17）。

むすび

以上、本小論では、フィリピン在住のユニークな歴史家兼コラムニストとして内外から注目されているアンベス・R・オカンボを取り上げた。紙幅の都合からその多くの作品について詳細な内容について議論することはできなかったが、その執筆活動の特徴は、ビセンテ・L・ラファエルが鋭利な分析をおこなっているとおりである。

しかし、あえて加筆すれば、オカンボの執筆活動の中心に位置している枠組みは、徹底した非階級史観ではないかと思われる。オカンボの一人ひとりを見つめる目、あるいは社会の動きを捉える視点の根幹には、ひとの意識や行動は、単に人々の出自や教育そして財産によって簡単に制約されるものではない、という考えがしっかりと位置づいているように思われる。そうした人間観はオカンボ自身が育った家庭や社会環境もさることながら、1990年代からフィリピン社会が近隣アジア諸国と同様にグローバル化の波のなかで変化し、従来以上にそのナショナリズムがもつ多面的表現やそのハイブリッド的特徴への探求が求められるようになっていったという事情があったのではなかろうか。

同時に、そうしたフィリピン社会の変容のなかにあって、今日にいたるまで多くの読者を獲得し続けるオカンボの歴史家としての原点は、同一分野の研究における先駆者たちの業績や軌跡についての徹底的な探求心にあるように思われる。その一例は、オカンボが1984年におこなった長時間のアゴンシリョへのインタビューであろう。このインタビュー記録は、1976年にフィリピンの著名な小説家F. シオニール・ホセのアゴンシリョとのインタビューを付録として、一冊の本として刊行されたのは1995年のことであるが、アゴンシリョが存命中に歴史家として仕事を自らの言葉で語った貴重な記録となっている（Ocampo 1995/2011）。徹底的な史料調査のみならず、フィリピン歴史研究の先人たちとのたゆまぬ交流がオカンボの筆致により幅広い味わいを読者に与えてきた源なのかもしれない。

（ながの よしこ 所員 神奈川大学人間科学部教授）

注

1 なお、オカンボ自身が語る歴史論については、(Ocampo 2001: Introduction) を参照。

〈参考文献〉

- Agoncillo, Teodoro A. (1956/1996) *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*, Quezon City: University of the Philippine Press.
- Ocampo, Ambeth R. (1990a) *Rizal without Overcoat*, Pasig City: Anvil Publishing.
- Ocampo, Ambeth R. (1990b) *Looking Back*, Pasig City: Anvil Publishing.
- Ocampo, Ambeth R. (1995) *Bonifacio's Bolo*, Pasig City: Anvil Publishing.
- Ocampo, Ambeth R. (1995/2011) *Talking History: Conversations with Teodoro A. Agoncillo*, Manila: De La Salle University.
- Ocampo, Ambeth R. (2001) *Meaning and History: The Rizal Lectures*, Pasig City: Anvil Publishing.
- Rafael, Vicente L. (1988) *Contracting Colonialism: Translation and Christian Conversion in Tagalog Society under Early Spanish Rule*, Ithaca: Cornell University Press.
- Rafael, Vicente L. (1997) "Introduction," *Luna's Moustache* by Ambeth R. Ocampo, Pasig City: Anvil Publishing.
- "Wikipedia Ambeth Ocampo" https://en.wikipedia.org/wiki/Ambeth_Ocampo
- アンダーソン、ベネディクト (2009) 『ヤシガラ碗の外へ』 加藤剛訳、NTT 出版。
- 永野善子 (2000) 『歴史と英雄：フィリピン革命百年とポストコロニアル』 (神奈川大学評論ブックレット 11) 御茶の水書房。
- 永野善子 (2002) 「フィリピンの知識人とポストコロニアル研究」 (神奈川大学評論専門委員会編『ポストコロニアルと非西欧世界』 [神奈川大学評論叢書 10])、御茶の水書房。
- 永野善子 (2004) 「解説」 (レイナルド・C・イレート、ピセンテ・L・ラファエル、フロロ・C・キブイエン著、永野善子編・監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』)、めこん。
- 永野善子 (2013) 「抵抗の歴史としての反米ナショナリズム：レナト・コンスタンティーノを読む」 (永野善子編著『植民地近代性の国際比較：アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』 [神奈川大学人文学研究叢書 31])、御茶の水書房。
- 永野善子 (2020) 「グローバル化時代のフィリピン革命史研究：近年の欧米研究者たちの動向」『神奈川大学アジア・レビュー』 第7号。
- 福岡アジア文化賞 (2016) 「アンベス・R・オカンボ／受賞者、福岡アジア文化賞」
<https://fukuoka-prize.org/laureates/detail/1b1f2638-220d-4d85-859c-b4cc2b7a28ad>